

外人留学生 過去・現在そして未来

小川光暘

(一)

日本の文化や歴史、あるいは美術、こうしたテーマで同志社へ留学する学生の多くが、私共の文化史学専攻に籍を置いて勉強をつづけている。アメリカ、中国、韓国、台湾、イラン、タンザニア、スペイン。過去二十年ぐらゐの間に来た留学生の国籍はざっと以上のようなぐあいだ、年代によって多少の移りかわりがみられる。

数年ほど前まではアメリカ合衆国、それもハワイ辺りからの留学生が多かったが、円高とともに数が減り、現在はゼロになっている。代わって急増してきたのが中国からの留学生だったが、昨年の天安門事件らしい減少の傾向がみえる。台湾、イラン、スペイン、タンザニアは数が少く、

いわば単発的な留学生なので、増減のカウントはできないが、イランは十年前の革命以来は途絶えたまま。スペインからの留学生は現役だが、大変珍しい傾向。私共の専攻ばかりでなく、おそらくは日本への留学生もこれまでは決して多くはなかった。こうした意味で現在がなばつてくれているたった一人の留学生が、何とかモノになってくれることを願っているのが現状である。このようにみえてくると韓国からの留学生だけは終始変わらず、いつも複数の学生がコンスタントに留学していることがわかる。

さて、外国から来た留学生が、同志社大学の文化史学専攻に籍を置いて、いったい何を学ぼうとしてきたのか、これまでに巣立っていった留学生を追憶しながら考えてみたい。まずアメリカ合衆国からの留学生の場合だが、これは

こちらの期待とは全く逆の結果に終わっている。というのも、アメリカでは日本研究が大変盛んで、日本文化の研究所や研究センター、あるいは大学では日本史の専攻もあつたり、立派な研究者がいたり、留学生自身が日本に来る前に、既にかんりのレベルに達しているものと思つていたが、やつてきた留学生はまるで日本文化や日本史に対する知識がない。このギャップの大きさに驚かされた。どうやらアメリカでは、アメリカにおいて日本文化史の専門領域にとり組む人間と、それとは別の感覚で日本にやつてきて日本文化を体験しようとする人間とが別々に存在しているようである。そして専門的知識を身につけて、いわば日本文化史のエキスパートになるタイプの人間は、前者の方に属するらしいのである。日本にやつてきて、日本の大学で日本文化史を学ぶタイプよりも、アメリカにおいて日本文化史を学ぶ方が専門家への道に近いというのは、一寸考えると逆の現象のように思えるが、じつはそうではない訳がある。

一口でいうとアメリカにおける日本文化史研究の歴史の長さ、その質の高さがこうした現象を生んでいる。今日でこそ我が国の大学の研究設備の水準は世界的レベルに達してきたが、終戦いらいの長期間、日本は経済復興には邁進したが、文化的研究の充実に立ちは遅れたままの状況が続いていた。ハーバード大学の図書館に行つた方が、日本史の研究がずつとはかどるといわれた程、研究図書や資料の

数も多く、しかも整理が行きとどいていた。現在でもまだまだこの落差を埋めるまでにはいたつていないかもしれない。

これはほんの一例で、日本文化の研究のためには、やはり本場の日本に來なくてはモノにならないと外国に誇れるほどの設備や内容は、まだまだ日本にはできていない。だからこそアメリカから日本へは本当の留学生はやつてこない。日本美術史の研究者を例にとつてみても、現在のアメリカで大家といわれる研究者は、ボストン美術館の東洋部長をしていた岡倉天心の孫弟子に當つている。もちろんアメリカの大学で育つた人である。それほど歴史の深さがあるということである。

アメリカ合衆国以外の国で、日本研究のレベルの高い国はさほど多くはない。西ドイツではかなりの研究者や設備があるが、とてもアメリカとは比較にならない。したがつて、合衆国以外の国からやつてくる留学生は、日本に來て、日本の文化史を学ぶ事で、自国では身につけられない体験と知識とを身につけて帰国する。こちらで大学院まで進学した学生の場合には、自国では日本文化史の専門家であり、パイオニアであるとしてその知識が期待されるとみることが出来る。母国に帰つて大学の教壇に立つていふ例はまだ僅かに二例にすぎないが、これからはそうした人材が多くなつてくるだろう。しかし折角優秀な人材が育

っても、国情が変わってそれが生かされない気の毒な例もある。イランから来た留学生の場合は本場にすばらしい学生で、ペルシャ文化の生れたシルクロードの彼方に、シルクロードのターミナル日本文化の研究組織が生れるかと期待をかけたが、革命という現実が一切を押し流してしまつた。ムハマッド・インシャイアン君というその留学生は、

それでも立派な修士論文を同志社に残して去り、亡命者同然の生活をフランスで続けている。彼が学ぼうとした日本に現存する古いイラン文化の残影は、例えば奈良の正倉院や法隆寺にある。ところが例えばイラン文様のもっている本当の意味が日本ではなかなかわからない。日本人にとっては単なるデザインにすぎないものが、それを生んだ母国では宗教的・思想的な深い意味を伴っていた。彼は母国の文化を日本で再発見し、われわれは母国人の知識によつて未知の世界を知ることができた。留学生がとり持つ文化交流の本当の値打ちはこういうところにあるといつても過言ではないように思う。

これと同じようなことは、中国や韓国の留学生の場合にもありうるし、またじじつそうした成果があがりつつあるのが現状である。しかし一般には、留学生は日本文化史というよりは日本の文化を、そしてより直接には日本と日本語を学ぶことに専念してきた。日本語という外国語をまづ身につけ、生活を通して日本の文化を体験し日本への理解

を深めることを彼らもまず目的としているし、われわれもまずそのことを願つてきたといえる。そしてこれまでに帰国していった留学生の多くは、この第一目的は達成してくられたと確信している。

(二)

留学生を受入れることによつて、われわれ教員も、また日本の一般学生も、他では得がたい知的恩恵をうけることが多い。早い話がタンザニアから来ている留学生から、彼の母国に季節のないことを知らされる。われわれは南国のことを常夏国などとよんでいるが、そんな呼び名は南国では通用しない。何時行つても夏だと思ふのは四季のある日本人の勝手な解釈で、南国には夏に当る季節語はない。もちろん冬も春も秋もない。このように、日本で当り前のことが、じつは外国ではそうではないことを知ること自体、貴重な体験となる。

アジア系の留学生の多くは、母国の未来への期待を双肩に担っている。日本が近代化して来たプロセスやその結果を、確りと見てたしかめて、それを祖国の建設に役立てようという意欲をもっている。だから、同志社大学で学ぶことは、決して自分一人だけの為ではなく、母国の未来のためでもある。留学生の生活にはそうしたひたむきさがある。新島先生がアメリカで学ばれた時のような心の働きが、今

日本にきているアジア系の留学生の心の中に輝いているのを感じることもある。これは日本の学生にもよく知っておいてもらいたいと思う。

懇親会のパーティーでの席のこと、お酒のせいもあるが、日本の学生がふともらした利己主義的な発言に対して、留学生が本気で怒ったことがある。人に迷惑さえかけなければ、自分がどのように生活したってかまわないではないか……。と多くの日本の学生は考えている。学生ばかりではなく、日本人がもうそんな思想にも反応しなくなってきた。人間は生れてきた以上、それぞれの人間にふさわしい使命を背負っている。そうした使命への自覚もなく、生れてきて、死ぬまでの間、できるだけ好きなことをして暮らしてみたいなどと考えることは許されない。

日本も長い間、発展途上国であった。歴史をふり返ってみると、古代や中世には中国大陸や朝鮮半島の先進国から学び、近代にはアメリカ大陸や西欧の先進国から学んで、常に発展途上の道を歩んできた。終戦後の約二十年間も同じく発展途上の道を歩んできた。そして発展途上にあつた時代には、常に目指す道があり理想があつた。国民にはその意欲があり、学生にも目標があつた。特に留学生となつて先進国に旅立つ際には、期待を背負い、希望に胸をおどらせる未来への夢があつた。日本の大和王朝から中国へ派

遣された「遣唐使」は、単なる外交使節ではなく、じつに世界最初の本格的な国費留学組織でもあつた。しかし学費を負担したのは日本政府だけでなく、中国政府も滞在費や学費を大きく負担してくれた。日本の近代化は、留学生を受入れてくれた先進諸国の精神的、経済的援助によつて常に達成されてきたことを忘れてはならないだろう。

もちろん選ばれて先進国に派遣された留学生の意気込みも並大抵のものではなかつたし、又多くの人から選ばれるだけのエリートばかりであつたことも想像できる。今、同社に学んでいるアジア系留学生の多くも、そうしたエリートばかりである。日本人の一般学生と同じだけの講義を聞いても、それを理解するためには何倍かの努力と能力がいる。日本人の学生のようにアルバイトをやっているのは、留学生としての目標は達成できない。だからその分は生活費を切りつめて自宅学習の時間を多く作る。奨学金の恩恵に浴している留学生でも、日本の学生よりは多くの学費がかかる。まして私費留学生の場合は大変である。一見のんきに学生々活を楽しんでいるように見えても、留学生の生活は日本の一般学生とは比較にならないきびしさがある。まして自宅通学の日本人の学生とはもう比較のしようもない位にきびしいと思つていい。

同志社大学はこのような種々のきびしい条件下の学生々活をしいられている留学生に、十分な配慮をはらっているのだろうか。カリキュラムの問題についてはこのような変な平等主義がある。日本の学生と同様に同志社では第二外国語を留学生にも課している。ドイツから来た学生はドイツ語を、中国からの留学生は中国語を第二外国語に選ぶ、するとドイツ語は初歩からアー・ペー・ツエーと学ぶことになり、中国人の留学生もイー、アル、サン、スーと初歩からの中国語をはじめることになる。たしかにドイツからの留学生がドイツ語の単位をとることはやさしいし、同様のことは中国人留学生の中国語、フランス人留学生のフランス語にも当てはまる。しかし果たして彼等は日本に来て母国語の単位をとりたいと願っているのだろうか。単位をとるのは簡単だからという意味ではいやがりはいないかもしれないが、彼らの貴重な勉学の時間を割いてまで、母国語の単位をとることを喜んでいるとは思われない。

外国人留学生を差別しないで、日本人の一般学生と同じカリキュラムで勉強させようとする主旨は正しいと思うが、そうした平等主義のひき起している不合理に対する配慮も大いに必要であろう。

大学院に進学する外国人留学生が増加している。文化史学専攻の大学院、日本史専攻に五名、そのうち三名は博士後期課程に進んでいる。大学院在学中の留学生は前期課程

の単位を取得し、あわせて修士論文を日本語で書きあげる。しかも二年間という最短コースでこれを通過しないと、三年目からは留年とみなされて大抵の奨学金はストップしてしまう。これがまず大変な難事業となる。今年の三月に日本文化史の修士課程を終了した院生は十一名いたが、二年間で終了した院生はたった一人しかいなかった。しかもこの一人は韓国からの留学生であった。彼が人並み以上の優秀な学生であったことは勿論だが、奨学金の打切りに迫られて必死の努力を積み重ねた結果であったことも事実である。能力と努力、加うるに極めて健康に恵まれた人物であったことも幸しているが、日本人の院生がすべて三年乃至十年という期間を要しているのを考えると、大学院のカリキュラムについても抜本的な反省が必要ではないかと思われる。これは正に私自身の課題でもある。

博士後期課題の外国人留学生のドクター論文の審査、並びに博士学位の取得への条件や手続もこれからの問題である。博士論文の審査基準は大きく改訂されているが、審査の手順や手続は昔のままである。受理審査にはじまる数々のハードルを手順よく運ぶためには大変な努力と期間が必要となる。外国人留学生への配慮というだけではなく、もっと広い視野から考えても、このややこしい手続きの簡素化に大学をあげてとりくむ努力も必要と思われる。

(大学文学部教授)

私のアメリカ留学体験記——外国人留学生受け入れの視点

馬場浩也

一九六七年七月八日、私は羽田から日航機に乗ってアメリカに向かつて飛び発った。同志社大学の経済学部を卒業してからそれまで二年ほど勤めた大阪の会社を辞めて、留学する事にしたのである。当時はまだジェット機がそれほど普及しておらず、私の乗ったプロペラ機は燃料を補給するために、途中でハワイに立ち寄らねばならなかった。英語もあまり話せず、飛行機に乗るのも勿論初めての私は、ただひたすら不安で、給油待ちの間、ホノルル空港のロビーで、何やら得体の知れない色鮮やかなトロピカル・ドリンクを注文する事さえもが身の縮むような大冒険であった。

その時の私のいでたちは、スーツケースと古びたヤマハのギターが一本。それまで会社に勤めていた時に貯めたお

金は向こうの大学の一年間の授業料と旅費を払うためにほとんど使い果し、サンフランシスコ空港に着いた時、私のポケットには四十ドルしか残っていなかった。それから一年、私の人生の四分の一をアメリカで暮らす事になるとは、当時の私には予想もつかなかった。しかし、そうした留学の経験とアメリカでの生活は、私の生き方や価値観、さらには人生そのものを大きく変える事になったのである。

今日、日本にも随分多くの留学生がやって来るようになった。その数は全国で三万人以上にのぼる。彼等の出身国は中国を筆頭に、韓国、台湾、マレーシアなど、アジア地域からの留学生が全体の約九割を占めるが、最近ではアメリカや中南米など、その他の地域からの留学生も増えつつある。政府は「二十一世紀へのビジョン」として、来世紀初

頭までに十万人の外国人留学生を受け入れる方針を打ち出しており、同志社大学でもこうした留学生受け入れ体制の整備と充実が望まれる。しかし留学生の受け入れに際しては、日本語教育の問題、学年暦の違い、学位取得の問題、住居の問題など、さまざまな問題が存在する。そこでここでは、私のアメリカ留学体験のエピソードなどをまじえながら、これらの問題のいくつかについて考えてみたい。

留学時代には私が一番困ったのは言葉の問題であった。曲りなりにも中学、高校、大学と十年間も英語を習って来た。大学時代にはE.S.S.にも入っていた。しかしそれだけの英語では、アメリカの大学で勉強するには不十分であった。今なら英語で書かれたものなら斜めに読めるし、その気になればエディ・マーフィより早口で喋れる。しかし最初の頃は英語が解らなくて、スチューデント・ユニオンでアメリカ人の学生がテレビのコメディーを見て笑っているのに、解らなくて、見栄を張って後からついて笑っていたのは悲しい想い出である。政治学の授業で先生が「ブレイト、ブレイト」と言っているので、「何でこんな所で皿の話が出て来るのか」と不思議に思っていたら、実はそれは「ブラトン」の事であった。英語を十年間も習って来たのにこんな具合だったのである。

日本に來ている外国人留学生にとっては、言葉の問題はもっと深刻である。現在、日本の大学では留学生の受け入

れに際し、国・公立大学では日本国際教育協会や国際交流基金による日本語能力試験を実施し、私立大学ではそれらに加えて独自の日本語能力試験を実施している所も多い。しかしそれにもかかわらず、入学したのに日本語が解らず、学業なかばで帰国せざるを得なくなる者も多く、日本語を習得するまで正規学生として扱ってもらえない場合もある。その際には学部レベルの留学で最低五年、大学院博士課程までなら十年を越す長期留学となり、留学生にとって大変な負担となってしまうのである。

こうした問題を解決するひとつの策として、幾つかの大学では留学生に対して英語による授業を開講している。同志社大学でも、カリフォルニア大学からの交換留学生に対し英語による授業を開講した。しかしこの事に関しては異なった考え方もある。つまり「彼等は日本に在るのだから、日本語が出来てあたりまえ」という考え方である。私も留学している時に「THIS IS AMERICA. SPEAK IN ENGLISH!」と言われた事がある。しかし日本語は極めて難解な言葉であり、また英語などに比べて、留学生が母国で日本語を学べる機会も少ない。この点を考えれば、少なくとも部分的な措置として、留学生の受け入れに際し共通語としての英語での授業を開講する事は考慮すべきであろう。大切な事はまず意志の疎通をはかる事であり、我々に出来る事で留学生にとって少しでも

助けになる事はすべきである。またアジアからの留学生が多い事を考えれば、将来は中国語、韓国語、マレーシア語などによる授業の開講も考えてみてはどうだろうか。

しかしそれと同時に重要な事は、留学生に対する日本語教育の充実である。ひとつの国の言葉の背景には、その国の文化、歴史、政治、経済、伝統、価値観などのすべてが潜んでいる。つまり外国語を習得するという事は、自分が今まで住んでいた宇宙の外に、まったく別の宇宙が存在する事を発見するに等しい。そしてそれなしには、真に外国の事を理解するのは不可能なのである。この事を考え、留学生受け入れの目的が単に学術的交流にとどまらず、国際理解を深め、国際協調の精神を育成する事にあるとすれば、外国人留学生に対する日本語教育の充実は、彼等を受け入れるにあたって最も重要な課題のひとつとしてとらえられるべきである。また日本語や日本文化の授業を専門科目として認める事や、大学院において日本語を単位取得に必要な外国語のひとつとして認めるなど柔軟な姿勢も必要であろう。

留学してもうひとつ私が困った事は、お金がなかった事である。特に最初の一年はつらかった。前にも書いたが、サンフランシスコに着いた時、私のポケットには四十ドルしかなかった。ペンシルバニア州のバックネル大学に入学を許可されていたが、そこへ行く旅費さえもないのである。

途方にくれた私は、サンフランシスコのブロードウェイ界隈の店々を軒並みにあたって、何か仕事をさせてほしいと頼んでまわった。勿論、飛び込みである。結局、私が手に入れた仕事は、チャイナタウンの中国人が経営する洗濯屋の下働きと、八百屋の荷物運びであった。そして夜にはオフ・ブロードウェイのあやしげなバーで、ギターを弾き歌を歌った。それやこれやで、二カ月たらずで数百ドルのお金を手にした私は、やっと目的のペンシルバニアに行く事が出来たのである。

ペンシルバニアに着いてからも、お金がない事には変わりはない。学費は何とか工面して前もって払ってあつたから良かったが、食費や部屋代は自分で稼がなければならぬ。食費が一月十ドルという時もあった。スーパーマーケットでたまねぎが安かったので買って、他に食べる物がないからそれだけをオニオン・サラダにして一日中食べていたら、お腹が燃えるように熱くなって、死にそうになった。だから、オニオン・サラダはもう二度と見たくない。

しかし、そんな私を救ってくれたのは、アメリカカの大学の奨学金制度である。衆知のとおり、アメリカの大学では各種の奨学金制度が普及しており、それらは学業成績を条件として、外国人留学生にも平等に支給される。こうした制度の背景には、すべての人に平等な教育の機会を与える

事は、民主主義を健全に守るための必要条件であり、社会の責任であるとするトーマス・ジェファソン以来の伝統と理念がある。私もこうした奨学金制度のおかげで、最初の一年を除いて、修士課程から博士課程を修了するまで、アメリカ留学中自分で学費を払った事は一度もない。それどころか、二年目からはティーチング・アシスタントシッパやグラジュエイト・フェローシッパがもらえたので、もはや生活に困る事もなく、学生としてはけっこう優雅な生活を送る事が出来たのである。それに比べて、日本の留学生に対する奨学金制度はあまりにも貧弱である。とりわけ大学そのものが設置する奨学金制度はアメリカなどに比べると遅れており、その受給者は留学生全体の三〇%にも満たず、その額も限られている。資金的な問題はあっても、成績の優秀な者に対しては、私費留学生に対してもせめて授業料だけでも全額免除にする事は出来ないのだろうか。また、アメリカの大学のように、各種のキャンパス・ジョブを留学生に開放する事は出来ないのだろうか。たとえば学生食堂や図書館のアルバイト、メインテナンス・クルーのアルバイトなどである。そうしたところで外国人留学生がひとりも働いていない事は、私にとつてはむしろ不思議に思えて仕方がない。

日本に来ている留学生が一番困る問題のひとつとして、最後に住居の問題をとり上げなければならない。私も住居

の問題では困った事がある。ペンシルバニアの大学にいた頃、ベトナム戦争がエスカレートし始め、テレビでは毎日その様子を放映していた。私の下宿の家主のD夫人は八十四歳で、生れてこの方、ペンシルバニア州の片田舎にあつたその町を一步も出た事がなかった。おまけに、困った事に彼女は老人性痴呆症にかかり始めていた。彼女は夜毎放映されるベトナム戦争の様子を見て、日米戦争がまだ続いていると勘違いしたのである。夕方のニュースを見せてもらおうとテレビのある居間に入って来た私の姿を見た彼女の顔は、恐怖にひきつっていた。結局、私はその下宿を二カ月で追い出される事になった。しかしそれ以外は、私はアメリカ留学中、住居の問題で困った事は一度もない。それは留学生も含めて、アメリカでは学生に対する住居設備が整っているからである。

アメリカのほとんどの大学では、学生はキャンパスやその周辺に住む事を原則とし、それらがキャンパス・タウンと独特の文化圏を形成する。そのためにアメリカの大学では学生寮やその他の住居設備が完備し、タウン周辺には大がかりな自治体が経営する学生用の安価なアパートなども豊富にある。留学生たちはこうした所に一般の学生と一緒に住み、その中でお互いの交流と理解を深めるのである。

大学によつては、たとえばカリフォルニア大学のインターナショナル・ハウスのように、留学生と一般の学生の交流

をはかる事を目的として建てられた寮も多い。

日本の留学生の住居に関する最大の問題は、こうした設備が絶対的に不足している事である。現在、日本に来てゐる留学生のうち、大学などが設置する学生寮に居住する学生は約二割に過ぎず、残りの八割は民間の下宿やアパートなどに居住している。こうした下宿やアパートは応々にして劣悪な状態にあり、住居費も高く、下宿代が払えずに一部屋に数人の同国人が居住しているケースもめずらしくない。そして何よりの問題は、留学生がこうした状態で孤立し、一般の学生から隔離されている事である。そうした状況では、彼等が一般の学生と交流を深める事も出来ないし、ましてや彼等の生活の基盤である住居環境が劣悪であれば、學術の習得さえもおぼつかない。こうした状況を改善するためには、各大学が留学生用の学生寮などの住居設備を緊急に拡充する必要がある。同志社大学でも、田辺の広大な土地に、留学生と一般の学生の交流がはかれる学生寮の建設を考慮してみてもどうかろうか。

振り返って見ると、私はアメリカ留学の体験から随分多くの事を得た。それらの中でも、かけがえのない多くの素晴らしい友達に出逢えた事は、私の人生の大切な財産である。そしてそれを可能にしたのは、外国人留学生受け入れに對するアメリカ社会のおおらかさと、ふところの深さであった。今日、日本でも国際化の必要性がさげばれ、その中で、

外国人留学生受け入れ体制の整備と充実がその最も重要な柱のひとつであるとする認識も高まっている。しかし一方では、日本の大学の外国人留学生受け入れに對する取り組みは、ややもすれば欧米諸国からの留学生の受け入れのみを中心と考えがちである。大学によっては、そうした留学制度を減少しつつある受験生を惹きつけるための「目玉商品」のようにとらえている所さえみうけられる。しかし、今後日本で増加し、また受け入れていかなければならないのは、主としてアジアの近隣諸国からの留学生たちである。彼等の多くは私費留学生であり、経済的問題だけではなく、多くの支障を乗り越えて日本にやってくる。そして彼等が日本にやってくる目的は決して學術の習得だけではなく、少しでも日本を理解し、日本の良い所を学ぼうとしてやってくるのである。外国人留学生の受け入れに際しては、欧米諸国からの留学生だけではなく、そうした彼等に対して、日本の社会のおおらかさと、ふところの深さを示したものである。新島襄先生は「理論で物事を判断するのはたやすい。しかし願わくば、その理論に少くも愛を加えなさい」と説いておられる。その精神を留学生受け入れに際しても活かせるならば、他大学の物真似でない、同志社大学独自の素晴らしい留学生受け入れ制度が生まれるはずである。私はそれを望んでやまない。(大学経済学部教授)

女子大学における外国人留学生の現状と課題

森田明春

同志社女子大学における国際交流事業は、米国ヴァージニア州にあるメアリー・ポールドウィン女子大学 (Mary Baldwin College)、英国のウォリック大学 (University of Warwick) における夏期研修と、米国東部の名門女子大学スミス・カレッジ (Smith College)、ウエルズ・カレッジ (Wells College) 及び前記のメアリー・ポールドウィンへ各二名ずつの本学学生を一年間派遣させる長期留学などを柱として運営されてきたのであるが、特にメアリー・ポールドウィン大学とは姉妹校としての協定を結んでから丁度十周年を迎えることになり、それを記念する事業の一環として、このプログラム開始当初より参加し、熱心な指導に当たられたジュリア・ディーン (Julia Dean) 先生を一九九一年四月から一年間国際交流委員会のゲスト・ティーチ

ャーとして招聘することになっている。さらには、メアリー・ポールドウィンからも隔年ごとに、約十名の学生が本学田辺キャンパスにおいて日本語・日本文化研修プログラムを行っている。

夏期プログラムでは、四年制がメアリー・ポールドウィンで、短大が英国コヴェントリーのウォリック大学でそれぞれ一般教育の正式科目の一つとして約一カ月間の学習及び研修旅行、ホームステイなどを行っていて、どちらのプログラムも学生、父母から高い評価を得ている。約三十名の定員に対し毎年どちらも百名を超える応募があり、学生、父母の双方からプログラムを増やすよう要望が強く、国際交流員委では、来年度から短大にもう一つプログラムを増やすことを考えている。近い将来は、短大、四年制の両

方にそれぞれ、アメリカとイギリスプログラムを一つずつ持つことを理想としている。しかしこれらには引率のディレクターの人選その他難しい問題が付随する。夏期休暇中の一カ月を奪われ、研究の時間を失うという問題もあるし、論文の点数が減ることから、特に若手教員の間には引率者に選ばれることを歓迎しない空気が生じてくるのである。委員会としては、引率という責任のある活動をもっと評価して、昇任その他の面に反映させてくれるよう当局に強く訴えたいところである。

本学の学生が米国の大学に一年間留学する場合には、彼らの学年歴の相違が直ちに問題になってくる。九月に始まる米国での新学年に間に合うためには、本学での学業を三月に終えてから夏までがブランクになる。同じように、米国での留学を六月に終わっている本学での次年度新学期に遅れてしまう。帰日後も新学年の登録その他多くの点で問題が生じるのである。これがもしも四回生の場合であれば、卒業、就職、教育実習といったいずれも重要な問題を解決しなければならぬ。これまでのところ女子大学では、こうした問題を割合に安易に融通を利かせてきたのであるが、今後はもうすこし厳しい態度で臨む方向を目指すことで意見が一致している。四回生の留学は避けた方が無難であるには違いないが、学年歴の上で双方に相違さえなければこれらのことは問題にさえならないという点を考えるな

らば、近い将来、日本の学年歴を欧米のそれに合わせて行くことを真剣に考えるべき時期に来ているのではないかと思われる。

さてここまでは、女子大学からの海外での研修並びに留学とそれにまつわる問題に触れてきたのであるが、ここで眼を海外からやって来る留学生の方に向けてみたい。先述の通り本学では現在、隔年にメアリー・ポールドウィンから十名前後の学生を六月中の約三週間受け入れて、日本語・日本文化研修プログラムに従事させている。これに関しては、過去十年以上の間、メアリーとの交流のうちに培ってきた経験を生かして、数多くのホームステイ受け入れ希望家庭を確保してあるので、これまでは全ての学生を日本人の家庭に迎え、そこで直接日本語及び日本文化に触れる機会を与えることができた。勿論、日米の生活習慣、文化、思考の相違などから思わぬトラブルが発生することは避けることができない。キャンパスでの授業やクラブ活動、礼拝への参加などに関しても、アメリカ娘達の自由奔放な振舞などから、授業を担当する日本人教員や本学の学生たちとの間に種々のイザコザが生じることも少なくなかった。しかし、考えようによつては、こうした衝突こそが異文化との接触における大きな要素となるのだから、双方がそこから相手を理解しようとする精神を学び取って行かねばな

らないであろう。メアリーの学生達は母校では日本語クラスに所属し、或る程度は日本語や日本文化の背景を学んでくるのであるが、それらはほんの初歩の域を出ることもない。日本訪問を勉学のためにというよりは、観光気分で見ているのが現状である。日本語運用能力に見るべき進歩が得られないのもそこらへんに原因がありそうである。

これら以外に同志社女子大学には現在、大学院における聴講生の他に、短大英米語科一回生一名、四年制の家政学部・食物学科に一回生が一名の都合二名の正規の外国人留学生が在学している。食物学科のG嬢は中国人であり、北京にある短大で食物学を専攻し、卒業後北京大学で実験助手の仕事に何年か従事した後、その研究生G氏と結婚した。その後夫が大阪にある大学に留学することになった機会を利用して、自分の研究領域である食物学の勉強をするため関西では有数の実験設備を誇る本学家政学科に入学したのである。彼女は現在は京都大学近辺のアパートで夫君と共同生活を行いつつ、勉学に勤しんでいるが、主婦としての勤めと、フレッシュマンの任務をけなげに果たしている。日々のハードなスケジュールの合間に図書館に通い、授業で実験機具を扱い、一方で日本語を日本人の先生について習い、学友たちとの交流を通じて必死に学んでいる。中国には食物学関係の実験設備が貧弱らしく、彼女の日本

での生活は、知的刺激と緊張に満ち充実したものであると聞く。普通の女子学生とは異なり、年齢的にも成熟しており、確固とした目的意識を持って学業に専念している点などから考えても、本学での食物学研究の選択は正しかったと思われる。更に幸運にも、彼女の場合は、アメリカに富裕な祖父母が健在で、彼女とその夫の生活費、学費などの経済面での面倒を一切引き受けてくれるという羨ましい状況である。本学での四年間の勉学のアとも、そのまま大学院に進みたいという強い意向をG嬢は抱いている。

もう一人の短大英米科K嬢の場合はかなりG嬢とは異なっている。タイ人とはいえ彼女の母親の方は日本人であり、K嬢は日本語には何ら不自由しないうえに、英語は彼地で日常語であるという事情もあって流暢そのものである。本学短大生としての生活を大いにエンジョイし得る状況にあり、クラブ活動にも積極的である。今夏のイギリスプログラムにも参加し、ウォリック大学での体験から、同女大のみでは得がたい事を色々と学んだことと思われる。彼女の場合は現在伏見区にあるアパートに住んでいるが、母親の方の親戚の家に自由に起居してもいる。

両者はともに現在、外国人留学生のための学費減免措置を受けており、かつ何らかの奨学金も受けているのはあるが、何れも充分なものではない上に、母国を離れて外国の大学での留学とそれに伴う生活面での経済的負担の全て

は本国の両親に掛っているわけであり、その額は大変なものである。いかに向学心に燃えていても、本国以外での望みを果たすことは容易なことではない。経済的にそれほど恵まれない外国人留学生に勉学の機会を与えるための抜本的な策を講じることが急務であると思われるのである。

女子大学における外国人留学生はこれまで全てアジア系の学生であった。そして大学院へ進んで行く正規の留学生はいなかったこともあって、博士号授受にまつわる問題は生じていないが、今後この方面での留学生を迎える機会も増えると思われるので、今から起こるべき問題を想定し、然るべき対応策を講じておく必要があるだろう。

女子大学ではこれまでは主にアジア方面からの留学生を受け入れていたが、今後は欧米、特に米国からの留学生を迎え入れることを本格的に考え始めている。二年前に開設した日本語・日本文学科の四年次開講科目の中に『日本語教授法』があり、そこでは、外国人に日本語を教える技術を習得し、またその資格が与えられるが、欧米の学生にその授業を受講させることもできようし、そこで資格を得た日本人の学生に、学問だけではなしに、日常生活面においても留学生の指導、アシストに当たらせられるだろう。

これまでも、メアリーだけではなくその他いくつかのアメリカの女子大学から留学生を受け入れて貰いたい旨の

要望が寄せられていたのであるが、日学の第四年目が終わるまでは十分な受け入れ態勢が整わないことを理由に全てお断りしてきたが、ここへきてようやく国際交流委員会では、二年後を目指して、英米の留学生受け入れの問題に本腰を入れて取り組み始めたというわけである。本年六月には、スミス・カレッジの East Asian Studies のディレクターであるデニス・ヤストモ (Dennis Yasutomo) 教授を本学に迎えてその問題について細部にわたって論議する機会を持った。スミス側の意向としては、原則的に留学生数名が一年間同志社女子大学で日本語・日本文学・日本文化などを勉強し、取得した単位はスミスの単位に読み換える。学年歴の相違があるので、四年生は留学させない。住居はできるかぎりホームステイが望ましい。その他にもいろいろ希望が述べられた。我々委員会としては種々検討を重ねた結果当面次の様なテンタティブな計画案を作成して教授に示してみた。留学生を二つのグループに分ける。一つは一般留学生で、本学での卒業資格を目指すもので、各学科に所属して十分な日本語運用能力が要求され、『留学生特別科目B群』を履習する。他は原則として一年間の留学で、日本語の能力が比較的乏しい学生のためのコースで、英語による日本研究科目『留学生特別科目A群』を英文学科設置科目として設ける。『留学生特別科目B群』の開講科目の一例としては、

「日本語(中級)」— 半期、二単位—
「日本語(上級)」— 半期、二単位—
「日本語概説」— 半期、二単位—
「日本文化」— 半期、二単位—
「日本事情」— 半期、二単位—

などが考えられる。

『留学生特別科目A群』は前述した通り、英文科内に設置される英語による日本研究である。開講科目例としては、

Introduction to Japanese History (fall) 二単位
Japanese Foreign Relations (fall) 一単位
Problems in Modern Japanese Politics (fall) 一単位
Japanese Economic Development (fall) 一単位
Women in Japanese Society (fall) 二単位
Religion in Japan (spring) 一単位
Traditional Japanese Literature (spring) 二単位
Modern Japanese Literature (spring) 二単位
Survey of Japanese Art (spring) 二単位
Comparative Literature (spring) 二単位
Japanese Language (fall & spring) 二単位

などが考えられる。ヤスモト教授はこれらの授業計画案の

全てに多大の関心を示された。勿論これらはあくまでも案であって、この骨子に添ってできる限り実現へ向けて努力を重ねるつもりであるが、全てが理想通りに運ぶとはとても思えない。講師陣の確保といった単なる授業面での問題のみではなく、外国人留学生を實際に迎える際に彼我の間に横たわる障害は少なくない。単位の読み換え、奨学金、住宅事情、特に学年歴の相違からくる時間的な無駄等々難問は数多いが、我々はそれらの一つ一つを克服する努力を避けることなく、国際的視野を誇る同志社教学の地平線を探って行かねばなるまい。

繰り返しになるかもしれないが、国際交流事業に関していつとも痛感させられるのは、欧米と日本間に横たわる学年歴の差違である。こちらから学生を一年間留学させるという単純な問題でさえ、三月に本学での学業を終えてから九月まで待機しなければならない。欧米から迎える留学生の場合も事は同じであって、こちらに半期ものの授業が用意されていなかったならば、一年間の留学といっても実質的には半年ものと言えない中途半端なものでしかなくなる。同じことは教員の海外留学の場合にも当てはまる。外国の学年歴に合わせて九月から一年間留学するということは、本学における授業計画の全体の中では二年間のプランクになる勘定である。四月新学年は日本以外に東南アジアでの数カ国のみという現状を考えても、時代の潮流は明

らかに欧米国の方に流れているのである。誰かがしつかりリーダーシップを発揮して学年歴の欧米化を計って貰いたい。現今のこの国際化傾向、学術交流の必然性などから考えても、もはや、新学年を桜の花と共に始めるのが日本人の

美意識であるなどと悠長な事を言っておれる時期ではないと思えるが如何なものであろうか。

(女子大学英文科教授、教務部長、国際交流委員長)

追悼集 I

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——明治十年代～明治四十年

追悼集 II

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——明治四十一年～大正四年

追悼集 III

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——大正五年～大正十五年

同志社では明治二十年ころから、社長(総長)をはじめ役員、卒業生、教職員、学生生徒が永眠すると、その死亡記事とともに、追悼のこぼや故人の略歴などを各学校の機関誌(たとえば『同志社文学』『同志社女学校期報』『同志社校友会会報』『同志社時報』など)に掲げて哀悼の意を表してきた。

その貴重な記事は、これまで古い機関誌の中に埋もれていて、極めて利用したい状態にあったが、社史資料室は先年来、それらの記事の総てを探し出して書物にまとめる作業をおこなってきた。

第一巻には、新島襄、山崎為徳、山本寛馬、森田久万人、片岡健吉らの他、男女各校の関係者約一〇〇名の記事が収録されている。

第二巻には、J・D・デイヴィス、元良勇次郎、市原盛宏らに関する記事の他、第一巻以降の年次に機関紙に掲載された新島襄、山本寛馬、松本五平らの資料も収録されており、約一一〇名の記事を収めている。

第三巻には、松浦政泰、S・B・ニコルズなどのほか、同志社大学教員の川中勘之助、永田伸也、福井貞一、嶺岸四郎など、男女約三〇〇人を収録。上田敏、厨川白村、有島武郎など講師の名も見られる。また、伝染病や関東大震災による多数の死者の記事が痛ましい。

『追悼集』は、それぞれ何らかのかたちで同志社史を彩り、また同志社史を築いてこられた物故者たちを記念するものであるとともに、「同志社人名録」の役割をも果たすであろう。

『追悼集』は各巻(各一五〇〇円)とも同志社収益事業課で取扱っている電話(〇七五)二五一—三〇三七・八